

シンポジウム

基調講演：「富士フィルムの業容転換と知財マネジメント」

【講演者】

鈴木 俊昭（富士フィルム株式会社 参与）

【略歴】

1974年 京都大学大学院 工学研究科修士課程修了
1974年 富士写真フィルム株式会社入社
2004年 同社 機器商品開発センター長
2006年 同社 執行役員 メディカルシステム開発センター長
2007年 富士フィルム株式会社 執行役員 メディカルシステム事業部長
2009年 同社 執行役員 知的財産本部長
2011年 同社 取締役 執行役員 知的財産本部長
2013年 同社 参与

【講演要旨】

20世紀終盤からのデジタル化、IT化による急速な技術革新の波は、世界経済のグローバル化、ボーダレス化と相俟って世の中を大きく変えつつある。多くの日本企業は生き残りをかけ、また新たな成長シナリオを求めて厳しい経営変革に挑戦している。

富士フィルムは21世紀に入り写真フィルムの世界的な需要急減を受け、大きな経営の転換を余儀なくされた。中核事業が消失しても企業体としては存続し続けなければならない。新たな企業ミッションを掲げ、「第二の創業」として大胆な業容転換に挑戦し持続的成長に向けた取り組みを進めてきた。写真フィルム事業に対する徹底した構造改革、それと並行して既存有望事業への投資の強化、さらには自社技術の競争力、潜在力の見える化による新規進出分野の設定とM&Aを含めた経営資源の集中投下を図るなど、独自技術が活かせる市場成長も期待できる6つの事業分野を見定め、新たな戦略に基づいた事業活動、R&D活動の強化を進めてきた。

この一連の業容転換の動きに対して、知財マネジメントはどのように対応してきたのか。確固たる中核事業が存在し、大多数の組織構成員がその事業の競争力強化、事業拡大に向けて意思を共有していた時期の知財マネジメントと、中核事業が消失しつつある中で、既存事業の強化拡大さらには新規事業の創造により新たな成長路線を切り開いていかなければならなくなったフェーズでの知財マネジメントでは変わらざるを得ない。

これら業容転換と知財マネジメントの対応をどのように進めてきたのか、その状況と今後の課題についてご紹介する。